



# なんでやねん



発行責任者 倉橋 忠

No.8 6

## 反当たりの米の収穫量から歴史を考えよう

班田収授法によれば、6年ごとに戸籍をつくり、民衆に口分田を分け与える。

人々は租を納め、本人が死んだら口分田はすべて国(天皇)に返さなければならない。

口分田

- ① 6歳以上の男子には、2段(反)の土地。
- ② 6歳以上の女子には、1段(反)120歩の土地(男子の2/3)。
- ③ 奴(男の奴隷)には、240歩(良民の1/3)
- ④ 婢(女の奴隷)には、160歩(良民の1/3)

単位換算

|                            |                                    |
|----------------------------|------------------------------------|
| 1段(反) = 360歩 = 10畝 = 約10 a | 1町 = 10段(反) = 1ha                  |
| 稲50束 = 1斗1合                | 米 1石 = 10斗 = 100升 = 1000合 (米150kg) |

### \*\* 考えよう。律令時代の民衆の生活。 \*\*

「養老律令」(養老2年 西暦718年)によれば、水田1段(反)あたりの収穫高は、稲50束(現在の1斗1合)である(ただし、9世紀半ばには上田1反あたり72束)。したがって、1町の水田からは500束 = 1石1升の収穫があったことになる。

しかし、民衆に支給された口分田は、「養老律令」に書かれた水田よりも悪い田が多かったとされている。学者たちの推定では、平年作でも、民衆の口分田での1町あたりの収穫高は、稲315束が平均的な数であろうと計算されている。つまり、律令の計算の基準とされた水田の63%しか収穫できなかったのである。

正倉院に残っている下総国葛飾郡大嶋郷(現在の東京都葛飾区金町付近)の戸籍(養老5年 西暦721年)には、当時の郷戸(血縁で結ばれた「家」のような人の集団)の31戸分が記録されている。その中で、1戸の郷戸(27人)には、3町7段(反)180歩の口分田が与えられたと考えられている(参考文献 家永三郎編『日本の歴史』1 ほるぷ出版 pp.171-173)。

そこで、その郷戸(27人)の収穫高を計算すると、

$$3.75(\text{町}) \times 1010(\text{合}) \times 0.63 = 2386.125(\text{合}) \div 2 \text{石}3\text{斗}8\text{升}6\text{合} \text{ になる。}$$

この約2石3斗8升6合は、27人分の米である。ここから租(1反あたり2束2把)を納めた。

この米だけで、生きることのできる人数は、せいぜい2~3人であろう。なぜなら、1人の人間が1年間に食べる米を計算すると、約1石1斗になるからである(1日3合の米を食べたとすれば、3(合)×365(日)=1095(合/年)になる)。

いったい、当時の民衆(私達の祖先)は、何を食べて生き抜いたのだろうか?

# 生きることへの挑戦 ちやうせん それが農業生産の向上のうぎやうせいさん こうじやうだった

肥料ひりやうの中で、日本史にほんしじやう上で最も古い金肥きんぴ(お金で買う肥料のこと)はウンチだった。

しかし、ウンチには、良い肥料になるものと、そうでないものがあった。そのため、農民は自分の舌したでウンチをなめて、ウンチの品質ひんしつを見極め、買い取り価格か と かかくを決めた。それほどまでして、農民は良質りやうしつの肥料ひりやうを求めて町を歩いた。現在、90歳以上のお年寄りとしよが身近みぢかにいる人は、そのお年寄りに聞いてみるとわかるだろう。

それが、鎌倉時代ころから、昭和の30年代はじめころまで続いた、農民の生活の歴史なのだ。昭和30年代から普及ふきやうした化学肥料かがくひりやうは、この苦勞くろうから農民を解放かいほうした。

さて、江戸時代の幕藩体制ばくはんたいせいは、年貢・米を経済の基盤きばんとした。幕府は、農民に朱子学しゆしの倫理を強制きやうせいしたうえで、五人組制度を導入し、相互監視そうごかんしと連帯責任れんたいせきにんによって、徹底的に農民から米を奪うばい取った。その厳しい年貢の取り立てと、当時の生産力せいさんりきの低さが、農民生活を厳しく苦しいものにした。

農民たちは、増収ぞうしやうを願って新田開発・農具の改良しんでんかいはつ等に努力を重ねた。また、幕府に年貢を米の物納以外ぶつのおうに、銀納も要求された農民は、銀を稼ぐために商品作物かぜ(綿花めんかや菜種なたね)を栽培した。

| 年代     | 年      | 上田   | 中田   | 下田   |
|--------|--------|------|------|------|
| 奈良時代   | 700年頃  | 0.79 | 0.63 | 0.47 |
| 鎌倉時代   | 1200年頃 | 1.12 | 0.93 | 0.84 |
| 秀吉時代   | 1600年頃 | 1.21 | 1.03 | 0.93 |
| 江戸時代   | 1700年頃 | 1.40 | 1.21 | 1.03 |
| 明治6年   | 1873年  |      | 1.49 |      |
| 明治15年頃 | 1882年頃 | 1.35 |      | 1.12 |
| 昭和10年頃 | 1935年頃 |      | 2.24 |      |
| 昭和55年頃 | 1980年頃 |      | 3.73 |      |

高木和男『食から見た日本史』上 p.91 芽ばえ社 1986年  
上記文献は、1haあたりton(トン)で表しているが、  
読解を容易にするために、反あたりの石高で表した。

二毛作にもうさくは、農民から多量の米を奪うばうことを可能にした。しかし、二毛作ふきやうの普及ちりよくにより、地力の低下さを避けることができず、増産のための施肥せひはそれまで以上に重要な問題であった<sup>1)</sup>。加えて、綿花栽培めんかさいばいは、稲作いなよりも施肥効果せひこうかの高い肥料たかを要ひりやうした。

求きゆうした。そのような状況じやうきやう下で、登場した金肥ほしかが干鰯あぶらかすや油粕である。

「慶安御触書」で幕府も肥料づくりを啓蒙けいもう(正しい知識を持たない人に正しい知識を与えること)しているが、農民は自らの屎尿みづかよりも肥料効果しにやう的に優れる屎尿ひりやうこうかを都市部すぐに求めた<sup>2)</sup>。下屎しもごえこそ、最も安価あんかな金肥であったのである<sup>3)</sup>。

やがて、金肥たよに頼る商品作物栽培しやうひんさくもつさいばいの普及ふきやうは、農村に貨幣経済かへいけいざいを深く浸透ふかさせ、年貢ねんの機械的ぐな平等負担きかいてきとあわさって、農村の貧富ひんぶの差さを拡大かくだいさせたのである。

1) 楠本正康『こやしと便所の生活史』ドメス出版 1981年 p.31  
2) 享保のころ、尼崎城下の下屎のくみ取りをしていたのは、神崎・西川・今福・杭瀬・梶ガ島・中長洲・西長洲・東長洲・大物・東難波・西難波・竹谷新田・別所・塚口・東富松・西富松・尾浜・上之島・栗山・大西・三反田・時友・武庫庄・今北・浜田・東大島・西大島・東新田・西新田・道意新田の村々である。尼崎市『尼崎市史』第2巻p.573より  
3) 前掲 楠本『こやしと便所の生活史』p.49 同書は、ルイス・フロイス『日欧文化比較』を引用している。  
なお、荒俣宏は、人糞が金肥として成立したのは鎌倉時代であるとしている。荒俣宏「厠、便所、トイレの起源とは」『日本トイレ博物誌』図書出版社 1990年 p.11